
少年と空 - EAGLE KNIGHT -

マーベリック

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

少年と空 - EAGLE KNIGHT -

【Nコード】

N5181J

【作者名】

マーベリック

【あらすじ】

大人のエゴで世界は二つに分かれた。

東西冷戦の最中、尖閣諸島でこの戦争を終わらす『カギ』となるものが見つかる。新資源『プロトニウム』。これは石油の代用品となる燃料資源で半永久的にエネルギーを供給できる。両陣営はこの新資源を巡って戦争を始めた。核を使わない戦争を。

この物語の主人公でもある少年兵、かざみやしょう風宮翔はエースパイロットに憧

れ海軍のパイロットとして戦っている中、彼は戦場の現実を見る。
次第に彼は戦争とは何かを考え始める。

MISSION 0 プロローグ（前書き）

諸事情で長く編集できず本当にすみません。

そしてこの度、しよね空はリニューアルいたす！！

活目せよ！！少年たちが飛んだ空を！！

MISSION 0 プロローグ

灼熱の第二次世界大戦が終わった世界に今度は極寒の冬が訪れた。「冷戦」と呼ばれる冬が。

溶けては固まり、溶けては固まる氷はある時、完全に溶けた。

1983年 尖閣諸島沖にてプロトニウム発見

莫大な量の石油が埋蔵されている推測されていた尖閣諸島は社会主義国家の中国と資本主義国家の日本が領有権を巡って小競り合いをしていたが、この「プロトニウム」が発見されたせいで小競り合いは武力衝突へとエスカレートした。

プロトニウムの特徴は持続的かつ強大なエネルギーを発生させることと圧力をかけると個体、液体、そして気体に還元できることだ。

しかもこのプロトニウムは地下に2000兆トンも埋蔵されている。この島を取った者が冷戦を制す。と言っても過言ではない。

1992年 中国、北朝鮮、ソビエト連邦に加盟。

1993年 ソ連 国連を脱退

国連から脱退したソ連。これは世界の安全保障のシステムの崩壊を意味した。

その事に脅威を感じたアメリカ大統領のJ・ブッシュはニューヨークに西側の首脳を極秘に集め、ある「会議」を行った。

1995年

アメリカ、NATOを解体。後に西部資本主義連合（Western Capitalism Union）を設立。

この組織にはアメリカをはじめとする資本主義国家が加盟している。

これで世界は完全に二つの国、二つの思想に分かれたのであった。

武力が抑止力となる平和は、ちょっとした衝撃で崩れる積み木の城のように脆弱なものであることは歴史が証明していた。

1999年 ソ連、西部連合に宣戦布告

ソ連には理由があった。朝鮮半島にある38度線付近で遊んでいた少女を国境の警備兵が射殺したからだ。

この事件によりソ連の国民感情は爆発。ソ連の代表、ブレジネフ書記長は怒る国民を抑えれず取った選択であった。

世界中の軍力が衝突する戦争。これは歴史が始まってから三度繰り返された。しかし今回は勝手が違う。「核兵器」があるからだ。

両国は核を使わなかった。核を使えばどうなるかくらい分かっている。

しかし血は流れる。多すぎるくらいに。

そして国は、未来を担う少年や少女に銃を持たせ殺し合わせるようになっていく。

Mission 1 壊す手と救う手

2015年 4月12日 午前10時29分

統制の取れた最新鋭の銀翼、ノースロップ・グラマンF-28ワイバーンの編隊が春の太平洋を横一線隊形で春の太平洋の遙か上、20000フィートを飛行している。その姿は渡り鳥の大移動を彷彿させた。

『イーグル1より各機へ、敵機を捕捉。2時方向、高度20000、距離4000、三機だ。俺と2、3と4のペアで攻撃をしろ。挟み撃ち（サッチアンドウィープ）で行くぞ』

イーグル飛行隊の隊員全員のヘルメットに暗号回線の無線が入る。しかし、四番機の風宮翔は一人、違う空を飛んでいた。自分の心の中にある『上の空』を。

最新鋭機を扱うパイロットの彼の年齢は16歳だ。しかし、総力戦で減ったパイロットを補うために基本教育課程を修了した少年や少女は基本、徴兵させられる。いくつかの例外はあるが。

「おい翔、今回はきちんと命令に従えよ」

とレーダー索敵士の宮島竜也少尉が自分の相棒、翔に釘を打った。彼もまた16の少年だ。

「聞いてんの？」

返事がない。翔は自分の目の前にいる敵を撃墜することしか考えて

いない。

彼には目標がある。戦闘機で敵機を5機以上落とすこと。つまりはエースパイロットになることだ。

「しっかりとしてくれよ。怒られんのはお前だけじゃないんだから」
少し語気を強くして竜也は翔に言った。

そう、何を隠そうと風宮翔はこの隊の問題児である。

命令違反、無謀飛行の常習犯で、人は彼はこう呼んでいる「天翔る問題児」と。

「ん？」

翔の視界に広がる雲海に輝ける3つの点が表示された。その点もまた統制の取れた群れを作っている。距離は約2000メートル。どう考えても敵しか考えられない。

実戦の前の兵士は臆すものなのかもしれない。しかし、風宮翔という少年は違う。彼はマスクの下で闘志の笑みで口をゆがめていた。

「イーグル4より各機へ、敵機を発見しました。お先へ」

刹那、左端の機体が編隊の芸術的とも呼べる統制を完全に破壊した。

『イーグル4！！編隊を崩すな！！』

編隊長の命令はいつものように無視された。翔にとっても命令違反は朝日が空に昇るのと同然のものである。

エンジンはその回転数をあげる。耳を切り裂くような甲高い雄たけびを上げた。そして機はアフターバーナーの劫火をたぎらせ敵機の編隊に突っ込む。その姿はまさに闘牛の雄牛のようだった。

『翔！！戻れ！！』

隊長の怒鳴り声。それを気にもかけず翔は、けだるげに無線を閉鎖。そしてマスクの下でつぶやいた。

「敵を殺った分だけ勲章ももらえんだから、別にいいだろうが……」

と、翔は誰にも聞こえない声でエゴをぶちまけた。これが問題児と呼ばれるゆえんである。

目視して敵を己が目で何かと見定めるほどの距離へと接近した翔。

S U 2 7 か……

銀翼をはためかせながら翔の視界に飛び込む機体、S u 2 7 フランカーは最強の制空権用戦闘機と呼ばれている。

「ターゲットロック」

^{ヘッドアップディスプレイ}
HUDの中を舞う、グリーンのリティクルがフランカーに殺意の照準をすえさせた。

断続的なビーブ音がコックピット内に響き渡る。

「イーグル4。FOX2」

翔はそう宣言した後、トリガーを引き絞った。FOX2とは短距離

ミサイル、サイドワインダーの発射サインだ。

近距離の真正面フェイストゥフェイスという危険なポジションからのミサイル攻撃。予期もしてない攻撃に狙われた敵機はなす術も無く。爆音を立て塵と化した。

通常のサイドワインダーなら正面から撃つなんてそんな芸当はできなかつた。しかし、このF-28Bが搭載しているAIM9Xは正面にいる敵機や真横にいる敵機を攻撃することが可能な一品ある。

「一機撃墜！！」

歓喜に溺れる翔に竜也は声を張り上げいった。

「後ろにつかれてるぞ！！」

刹那、コックピット内に人の断末魔を連想させる電子音がこだました。ミサイルロックアラートだ。

そして、フランカーはミサイルを翔の乗るワイバーンに向け射た。炎の尾を引く死の妖精が目標をめがけ飢えた隼のように飛翔した。

「フレア！！」

翔は、左の薬指にあるボタン、いわゆる擬似赤外線球散布ボタンフレアに指をかけた。すると雲海に第二の太陽がその姿を現した。

そして翔は左へステイクを倒す。F-28は操縦者の手綱捌きを忠実に再現。背面飛行をはじめ。

コックピット内の天地は文字通りにひっくり返る。すかさず翔は、

機を下方へと宙返りさせる。スプリットS機動だ。

ミサイルは翔の思惑通りに^{フレア}囿に吸い込まれた。いわば、ミサイルの脅威を回避したのだ。

しかし、敵は安堵も与えてくれはしない。

「上から来るぞ!!」

大気を切り裂く一筋の30ミリ機銃の弾丸。

一瞬の生命のやり取り。瞬きをも致命的な隙に変わってしまう。だが、翔は相手の思考より早く反応していた。迫りくる弾丸を翔は銀翼を優雅に翻らせてかわした。

そして、閃光はむなしく虚空をえぐった。

「竜也、敵は？」

翔は^{インターコム}ICSで竜也に問うた。

「まだ後ろにいる」

「わかった」

不安の色を声色に満面に乗せた竜也に対し翔はどことなく楽しそうな声を上げている。

「いくぞ」

刹那、エンジンは耳をつんざかんばかりの回転音を立て機体を加速

させる。HUDヘッドアップディスプレイに表示されている速度計はグリーングリーンの文字は700
ノットを示した。

翔は敵の銃撃を翼を左右に翻すのと同時に、鋭く旋回するブレイク
機動をとった。しかし、フランカーはその背後に必死にしがみつい
て離れない。

締め付けるGが肺から酸素を搾り出した。

体が重い。目に違和感を感じる。しかし、彼にはこのGという存在
が彼に生きている実感を与えているようなものだと思っている。だ
から彼は操縦桿を切り続ける。

「こつなりや、芸当見せてやるぜ!!」

超音速の鬼ごっこを終わらすための奥義を翔は出した。操縦桿を思
いつきり手前に引き倒す。するとF-28は高らかに垂直に急上昇
した。

突然の切り返しに反応できなかった、スホーイのパイロットは翔の
ワイバーンをオーバーシュートしてしまった。

「もらった!!」

敵との間合いは、500メートル。一番有効な攻撃は、基本の一撃
である『機銃』だ。翔はロックので

きたスホーイにその照準を合わせ。トリガーを引き絞った。

ゼネラルエレクトロニクス社の開発したM-61A1ガトリング砲
の砲身は電気力で急速回転。分発6000の連射力で20ミリの

砲弾を吐き出す。その銃声はもう歩兵の装備する機関銃とはもはや違う領域の音をだす。銃声など聞こえない。聞こえるのは甲高い咆哮。たとえるのなら『チェインソー』の駆動音だ。

その砲弾はフランカーの美しいと誉れ高いボディを見るも無残に切り裂く。血潮の変わりに漆黒のオイルのような液体が飛び散った。

そして、そのまま炎上。爆発。

その爆発は言うこともなく、翔の両の目に映った。あたかも、夏の川原に浮かぶ花火のように。

「よっし!! 二機撃墜!!」

翔は歓喜の声を上げた。

「馬鹿野郎……殺す気か？」

背後から疲労困憊の竜也の死にそんな声をもらした。

しかし、マスクの下では竜也は安堵の表情を浮かべている。生存したという事実が彼にはうれしい物だからだ。

その一方で翔はまた別の喜びによっている。撃墜したという喜びだ。16歳の少年がいたく感情としては破綻していると思われる感情だ。しかし、そう教育されたのだから仕方ない。

しかし、その陶酔から目を覚まさせられた。

『イーグル1より4へ、後で隊長室に来い』

隊長の一条明大尉いちじょうめいの説教の通告で。

『へいへい』

と翔は気の抜けた返事を返した。

「また説教か」

ため息交じりの声を竜也は翔にぶつけた。

十

4月12日 午後4時08分 太平洋 第17機動艦隊 旗
艦 J・グラフトン

少し傾きだし水面を切りつけ太平洋を進む艦隊がある。連合海軍第17機動艦隊だ。その旗艦であるニミッツ級空母J・グラフトンは舵を東へと向けその巨体を歩ませている。

その中にある白く長い廊下を二人の少年が浮かぬ表情をして歩いている。

風宮翔と宮島竜也だ。

彼らの会話の内容はこれより迫りくる脅威、隊長の一条大尉からの説教をいかに回避するかだ。いくら

ミサイルや機銃掃射を回避してもこれだけは避けられない。

「言っただろ！！命令に従えっつ」

竜也は不満を翔にぶちまける。

「良いじゃん。生きて帰れたんだから」

そう言った翔は何処となくけだるげな表情を浮かべていた。命令違反をしてこれから上官に会うような兵士のする表情ではない。そう、悪戯がばれて教師に説教をされるような高校生の浮かべるような表情だ。

そう、彼の辞書には『反省』の二文字など存在しない。

そして二人は、第184航空隊ヘルハウন্ズの待機室前に到着。翔はノックしてドアをあけた。

ドアを開けたらデスクと椅子が一体化した機材が置かれた無機質な空間が広がっていた。そして、教室で言う教師用の机に彼、一条明大尉は腰を下ろしていた。

翔たちは歩み寄り、敬礼。その敬礼に大尉は一礼返す。

「呼ばれた理由はわかるな？」

開始が告げられた説教タイム。翔は一步前に出て言う。

「は、自分が命令違反をし編隊を崩したからであります」

「どっしてだ？」

売り言葉に買い言葉とはまさにこの事である。

「は、自分が前に出た方が効率的にソ連どもを掃除できると思います」

「だが、3が孤立した」

明は翔に言う。つまらない言い訳をした生徒を咎める教師のように。

「3と協力した方がお前の言う『効率』とやらは高くなると思うが？」

「ですが……」

「自惚れるなよ翔」

翔の弁解を明は遮った。

「戦争は、遊び場でもお前の撃墜数の稼ぎ場でもない」

そして付け足す。

「俺たちは殺人部隊じゃない。国防の要であることを忘れるな。殺人を楽しむ奴は俺の部隊に入らない。以上だ」

「は、すみませんでした」

翔と竜也は一礼して、ドアへ赴く。

「翔」

一条は翔を呼び止める。

「お前は どうして エース になりたい？」

翔の本質に触る質問をする。いつも仲間内で彼がどこかの漫画の主人公のように『俺はエースになる』と言っているのは周知の事実である。そして、この質問は誰もしたことがない。

翔はピクンと一瞬と待ったしかし翔は言った。

「パイロットなら誰でも憧れるからですよ」

翔は彼に一瞥。そのままその場から歩き去った。

十

2015年 4月12日 午後5時12分

茜色の夕日が差し込めるデッキは翔の特等席だ。その無限に広がる太平洋を照らす夕日を前にしたら自分の矮小さが露骨になってしまふ。だが、それが面白い。それが好きだから翔はここに毎日のように通っている。

今の彼は考え事をしている。何故自分はここにいて、何故エースを目指しているか？

答えなどない。いや見つからないだけだ。

そんな自問自答に明け暮れる翔はある気配を感じる。誰か背後にいと。パイロットの背中には目があるよなものだ。いつも後方を意

識する彼らだ、多少の気配なら感じ取れる。

「翔」

振り向いた翔が見たのはショートの小柄な少女だ。

「光か」

吉田光少尉、シースタリオンで救命士の職務を担っている少女だ。彼女と翔は言わば腐れ縁という奴で同じ軍学校を卒業。部隊は違えど同じ船に着任しているのであった。

「一人で何してんの？」

「見りや分かるだろ？夕日見てたんだよ」

「ふうん、一緒にいい？」

「別の場所あるだろ？」

つつけんどんに翔は言う。

「暇だから付き合いなさいよ」

無理やりその体を翔の左隣に入れる。翔はため息をついた。

「わあっただよ」

「で、今日はどんな一日だったの？」

振り返りたくない今日。でも翔は言う。

「普通だよ、普通に飛んで、普通に戦って殺った」

「そうなんだ。でも、翔は普通なのかもしれないけど、普通の人から見たら結構ハードだよ人を殺すのって」

光はそう言った。彼女の言うことは事実だ。16の少年なら普通、勉強に勤しみ部活に明け暮れ青春を横臥する。だが彼は危険な空を飛び、人を殺す。殺人は少年に背負うには重過ぎる十字架だ。背負うのがつらければ背負わさなければ良い。そのために国は教育を施す。殺人を正当化する教育を。

「しゃあない、だつて殺すしかないじゃん。俺らの国を壊そうとする連中を」

「でも、人殺しは悪だよ。国以前にさと人としての法があるでしょ？それは国ごときが捻じ曲げられないよ」

翔は言葉に詰まった。そしてそのまま光は去る去り際に言った。

「私は人を殺す中で戦場で、誰かを助けたいからこの道を選んだ。翔はどうして選んだの？」

翔は沈黙を保ち去り行く光に目をやらず夕日とにらめっこを始めた。

「俺にもわかんねえよ。だからこうして考えてんだろ？」

誰に向けていったのか分からない言葉を打つ波はかき消した。そして彼は再び自問自答を始める。孤独な自問自答を。

M i s s i o n 1 壊す手と救う手（後書き）

復活しました。今とある事情で海外にいるマーベリックです。

遅い更新ですが暖かく見守ってください。

MISSION 2 天使との遭遇

2015年 5月12日 午後7時19分

横須賀沖 第十七艦隊 空母 J・グラフトン

耳を聳するエンジンがこだまする空母の飛行甲板。そこで駐機されているノースロップ・グラマンF-28ワイバーンのたたずまいは一言で言うなら『優雅』だった。

流れるような機首に幅の狭い三角翼がその姿を特徴づけていた。一見古い外見の機体だがその中に積み込まれていた技術は最高峰とも言われるような代物だ。

ステレス構造などお構い無しに空戦に向く構造に徹した形を追求し、装甲パネルを強化カーボンを使用。

高性能な火器官制システム、広範囲における索敵が可能なレーダー…… などなど。

さすがはグラマン、艦載機を熟知しているな。とパイロットスーツを纏った風宮翔は機の装甲板をなでて心の中で賛辞の意を述べた。

彼は今、パイロットの重要な仕事の一つである『最終点検』を行っている。もし、機の装甲板に亀裂が入っていたら機は空中分解を起こすかもしれない。そうなる前に機をある程度下見することがパイロットの仕事でもある。

一通りの装甲板、ミサイルや増槽タンク（外部燃料をためておくタンク）の接続の強度を確かめて終えた翔はF-28のステップで登

り、その身をコックピットの中へと収めた。

最新の機器が割拠するコックピットの中でなれた手つきで主電源をつけ、そしてハーネスを締める。ハーネスとは車でいうシートベルトの事だ。

「おい那琥、上部の装甲板はどうだ？」

機の上でエルロンにオイルを注している整備士の長いポニーテールに可愛らしい顔立ちが特徴的な少女、弥生那琥准尉やよひなこに近接無線を使用して訊いた。

「特に異常なし。あと、少しフラップの油圧が落ちてるよ。でも、戦闘機動に以上はないよ。その綺麗な動きが最高よお〜ローレンスウー！はあはあ」

後ろで艶かしい声をあげ機を丹念に磨きをかける彼女に翔は言う。

「気持ち悪いからやめろ！！あと、俺はお前の上官だぞ。敬語使えよ」

だが彼女は口を尖らせ言い返す。

「同じ16歳に敬語なんて気持ち悪いからヤダ」

普通ならこの会話は『上官侮辱』だの何やらでややこしい事になるが実は翔はあまり気にしていない。むしろ逆に命令してでも敬語を使わせたくない。理由は簡単で、彼女と同じ『気持ち悪い』からである。だが彼も彼女の上官として体裁を守る義務がある。だから一応注意はする。形だけの。

「じゃ、がんばってね」

翔のヘルメットのスピーカーから那琥の声が聞こえた。

「竜也、ECMとレーダーの調子はどうだ？」

あらかじめ後部座席にいた竜也に問うた。

「良好。いつも通りだけどな。そろそろキャノピーを閉めたほうがいいんじゃないか？」

「わかった」

翔はキャノピーの閉鎖ボタンを押した。すると風防は音を立てながら二枚貝の殻が閉まるようにコックピットを包んだ。

『イーグル2、右エンジンをスタートしてください』

那琥は近接無線を使用して翔に指示をする。今回のミッションは、フランク・ウイルディ少尉とエドワード・エンフィールド少尉とのペアのCAPで彼らが編隊長である。そしてこのミッションは明日行^{コンバットエアパトロール}う海軍と海兵隊の『第七人工島』攻略作戦の為に必要な偵察である。

この軍事衛星が発達した世界でも偵察任務は重要である。衛星が見落とすような艦船などを調べる必要があるからだ。

翔はコックピットの右側にあるエンジン用のディスプレイの下にある『R』記されたつまみを上げる。

すると、徐々に機に伝わる振動とエンジン音が高まる。その振動はまさに荒れ狂う馬の胴震いのように搭乗者に伝わっていく。

そしてもう一声。

『左エンジンをお願いします』

なれない敬語のせいか、少しぎこちない口調。それとは裏腹に翔は慣れた様子で左エンジンを眠りから起こした。そして揺れとエンジン音はさらに強く大きくなった。

もう、このエンジン音はただの機械がなせる音ではない。竜の咆哮とも呼べる一品なのだ。

そしてギアを固定していた足かせを外された飛竜の足は自由になったがまだ真の自由を得たわけではない。発艦して風に乗ってからが真の自由を得ることができるのだ。

黄色いウェアを着たカタパルト・オフィサーが翔の乗るF-28Bの216号機に向け両腕の親指を立てた。このサインは『私の指示に従え』の意を持つ。人間の断末魔さえかき消す音を出すジェット機のエンジンが四六時中こだまする世界『飛行甲板』フライトデッキそこで頼りになるのはこのハンドシグナルだ。

翔はスロットルでエンジン出力を少し上げてみると、数十トンある機体はその巨体をゆっくりと右舷第一カタパルトへ向け進み始めた。

カタパルト仕官は慎重極まりない手つきで翔のF-28を誘導する。そして一番彼らにとっての大仕事をする瞬間が訪れた。そう、ギアとカタパルトの接続作業だ。カタパルトオフィサーは刹那とも呼べ

る瞬間のために体中の神経を彼の二つ目と手先に集中させる。

通例のように接続は成功。そして発艦作業は最後の段階へと向かう。F-28の背後に壁がそり立った。ノズルから出るアフターバーナーの業火から作業員を守るための砦とも言える、ジェットプロステディフレクターJBDだ。

「イーグル2、発進を許可します」

「2、了解」

翔はマスクを右手で口に近づけ返答。

数秒の間を置いてからカタパルトオフィサーは翔に向け高らかに三本の指を立てた。大空を舞うためのカウントダウンが始まる。

3

翔は下唇を舐め、エンジンをフルスロットル。刹那、エンジンはこの世のものとは思えないような喚起の咆哮をあげた。そして咆哮を乗り越し業火をノズルをたぎらえた。

2

翔は操縦桿を握りなおし。大空を舞う瞬間を心地よい緊張を胸に待つ。

1

深い呼吸。長い約3秒に別れを告げる。

指を折り終えた誘導員はその手を舐先へと突き出した。恒例のカタパルト始動サインだ。

その瞬間、固定されていたカタパルトは蒸気圧で始動した。その力は数十トンある鉄の塊をわずか90メートルを時速250キロで疾走させる。そして空へ投擲する。

蒸気をばら撒き疾走する翼は風を掴み空へと舞う。そして漆黒の空をそのアフターバーナーの烈火で照らす。その空舞う優雅な姿を見たら人々をこの翼を飛竜フイバーンと呼ぶのは当然である。

+

5月12日 午前1時9分 東シナ海

太陽は水平線の彼方へ消え、満月の照らす東シナ海。上空3000メートルを雲に紛れ飛翔する二機のF-28Bは国境近くを飛翔している。国境の近くにある人工島を高度3000、距離25から撮影するのが彼らに与えられた任務で彼らはその任を成し遂げた。

『こちらイーグル1任務終了。これより帰投する』

『了解。一度、嘉手納基地で給油と休息の許可が出ました。出発は

明日0830です。以上』

とデジタル暗号に包まれた声がイーグル編隊に告げた。

『まったく、長いバカンスだな。どう思う?』

無線で編隊全員にフランク・ウィルディ少尉はぼやく。

『タフな任務だからな。辛いな』

その、相棒で策敵士のエドワード・エンフィールド少尉も首を振って同意する。竜也や彼は少年兵のパイロットには欠かせない存在なのだ。戦闘機のコックピットにある多数の機材を少年少女が運用するなど至難の業。ならばパイロットと策敵士に分け各自の仕事を分担する。これがこの国のやり方だ。

『疲れたな……早く寝たい』

左翼に展開されているイーグル2の索敵士、竜也はため息混じりの声を上げた。パイロットも大変だが彼ら策敵士もハードな仕事をしている。リーダーのディスプレイと常時にらめっこをしているからだ。常時くらい部屋でパソコンやゲームをしているよな物だ。花形のパイロットの引き立て役。だが重要な仕事だ。

「竜也、上見してみるよ」

翔はキャノピーの天井を人差し指で突っついてやった。竜也は自分の天井を包むキャノピーの真上を見上げる。その瞳に移った物。それは幾千も幾万も広がる空と宇宙の合作。星空だった。

『ああ、凄いな……』

竜也はその口からポロリと言の葉を漏らす。

『奈々子にも見せてやりたいな……』

竜也が言ったその名を翔は知っている。だが、この編隊の一番機パイロットのフランクは竜也に問うた。

『誰だそれ？彼女か？なあ……教えてよ！！』

『いや妹だよ』

『なんだ。そうなんか』

とフランクは会話をしめた。

突然の事だった。2機のF-28の間を何かが通り抜ける。コックピットを襲う激しい衝撃。そしてそのそれは足跡を残していた。マッハコーンと呼ばれる空気の輪を。超音速を突破した際にできる空気の輪。それを人はマッハコーンと呼ぶ。

『イーグル1より2へ何か補足したか？』

そのときのフランクの声は真剣そのものだった。普段ははっちゃける男のフランクだが。いざと言う時はその軍務を全うする、これがパイロットという生物だ。

『2、ネガティブ。多分後方の雲に隠れたと思う。エド、出来たか？』

『今オームの首を絞めてる最中だ』

彼の言う『オームの首を絞める』と呼ばれる動作はIFF、いわゆる敵味方識別装置を使用する際の無線用語である。そもそもIFFは電波を送信して返信が来れば味方、無ければ敵というシステムである。

来る……

翔は何かを感じた。背筋の凍るような冷たい殺意。左に行かないと死ぬ。体中の何かがそう訴えかける。恐怖にも似た衝動が翔に急な左急回避レフトブレイクをさせた。

夜気を切り裂く鉛弾。本来当たるはずの空間にターゲットはおらず海面を切り裂く羽目となった。

翔の眼に刻まれた機影はとても特徴的だった。夜空に溶け込めるような冷たい黒色、どこかのアニメに出てきたような前進翼と双発のエンジン。思い当たる節はあのソ連のイカレた機体。Su47ベルクートしかない。

前進翼という画期的な構造で空気抵抗を最小限に抑え機動性をとことんまでに追及した機体、それがこのSu47ベルクートだ。

だが、扱い辛さゆえに使いこなせるパイロットは相当な手慣れとされる。見える結論はただ一つ。

奴はエースパイロット。

「イーグル2より1へ」

翔の声は何処か冷静だった。いや、爆発寸前の火山のように欲求を何処かに留めているようだった。

『どうした』

「敵機を捕捉。これより攻撃を開始する」

『待てよ、サッチアンドウィープで行くぞ』

だが、翔の返答は至極簡単だった。答えはNO。アフターバーナーをふかしイーグル1から離れる。

あのエースを落としたい。

生理的欲求にも似た殺人衝動が翔の理性を体から切り離れた。

最新の戦闘機F-28に乗った彼はまさに、殺人マシン。一度放たれたミサイルはその役目とロケット推進剤が切れるまで飛び続ける。今の彼はそれと同じ。死ぬか、殺すか。そのどちらかが彼の暴走を止める。

そして、超音速の『鬼ごっこ』の幕は切って降ろされた。

この遊びのルールはいたって簡単。相手の背後を取り、鉛弾かミサイルをその背中にぶち込めば勝ち。その逆をされれば負け。

翔は神経の半分をその二つの目に配った。目視で索敵をしている。もし、全神経を使ったら操縦どころではない。よって半分。

この暗闇では、レーダーが文字通り目になるが、敵はストレス。加えて、この空に溶け込むような漆黒のボディ。この二つの要素が辛辣なジョークを作り上げる。だが、満月の照らす空だ。敵が満月に照らされ見える可能性もある。または、アフターバーナーの炎が見える可能性もある。だから、彼は目視による索敵を行っている。

だが、敵のほうからその姿をさらしてきた。

ロックオンアラートがコックピット内に響き渡る。

間髪入れずに九時方向からの突然の銃撃。

だが、翔は読んでいた。左真横には大きな雲がある。そこから攻撃するのが一番安全であることを。ゆえに翔はアラートが響いた刹那とも呼べる時に操縦桿を手前に引き、垂直上昇をしていた。

彼の予想はまさにど真ん中を的中させており一筋の銃火が彼の戦闘機の下を通過した。

敵は一撃必殺を予想していた。それゆえに、その姿を月下に晒したのであった。

その照らされた姿は、まさに『天使』とも呼べた。

流麗で漆黒のボディが月に照らされ美しくも禍禍しかった。だが翔は臆す事無くその下唇を一舐めた。

「いくぜ」

翔はマスクのしたで低くつばやく。

そのまま機を相手へ急ターン。そのまま追撃を始めた。

ベルコートは左右に鋭く回避起動をとって、F・28に隙を作らずように誘導させる。だが翔もその角度より更に急な旋回をして抜かないように必死に飛び続ける。このやり取りは俗に言う『シザース』起動と呼ばれる。

「つぐ……」

背後の竜也はもれるような悲鳴を上げた。Gによる圧迫だ。

その一方で締め付けるGも感じずどんな機動にも必死に食らいつく翔は痛みも何も感じない。

彼は一種の兵士の職業病にかかっている。そう、『コンバットハイ』に。

極度の緊張や戦闘による恐怖のせいで、脳内にアドレナリンが分泌そうになると兵士は何も感じなくなる。一種の麻薬症状のような物だ。

今の彼が感じるたった一つの感覚。それは快感だ。

強い敵と戦える。その喜びだけが彼の精神を支配している。

『翔！！援護するぞ！！』

フランクの無線。だが聞こえない。周囲のことなどわからない。自分がどういふ状況なのかも。

だがもう遅かった。

翔は、落とされた。瞬きする間もなく。

分かった事は。何か一瞬でその戦況を変える奥義をベルクートが使ったということだけ。

黒煙を上げ錐揉みしながら最強とも詠われた最新鋭の戦闘機は暗黒の海へと飲み込まれたのであった。

MISSION 2 天使との遭遇（後書き）

用語解説

<HUD>

Head Up Displayの略称。

コックピットの正面にある液晶画面の総称。照準器や速度計などの役割をこれひとつで担ってくれる。ゲームとかのコックピットビューで投影されるアレ。

Mission 3 出会い

2015年 5月1?日 ??時??分

ここは何処だ？

暗い海だった。あるのは月光と闇、そして風宮翔だけだった。春の海といえどもまだ冷たく肌がピリピリと痛む。サバイバルキットから翔は無線機を取り出しスイッチをつけ言った。

『竜也聞こえるか?』

互いを呼び合うための命綱の無線機で翔は竜也に問うたが返事が無い。

先ほど攻撃で撃墜された翔。とつさに脱出したゆえに竜也の安全までは見ていない。凄まじい焦燥の波が翔の胸に襲い掛かる。

『頼む!! 竜也!! 応答してくれ!!』

半狂乱になって翔は無線に問いかける。生きていて欲しい。それだけだった。

死んで欲しくない……

翔は祈るように瞳を閉じた。

矛盾していることは重々承知している。人を散々殺した自分が言う

のは変だ。そんなことは良い。竜也は兵学校からの親友だ。絶対死んで欲しくない。それだけだ。

多分、翌朝に味方の救援ヘリが来て回収してくれるだろう。それまで待つか。

そんなことを考えながら翔は星の照る空を見上げた。

クラゲのように海面に浮かぶ彼は今、自分の小ささが身に染みるほど分かってきた。

大きな空の下、大きな海原の上、これほど幻想的で大きな空間なんてない。

だが、なんだか眠気を抑えられない。頭がズキズキと痛むのに。だが翔はその眠気に負けその重いまぶたを閉じた。

十

眩い光が翔の瞳をこじ開けた。まず感じたのは目覚めに伴う倦怠感けんたいと頭を突くような痛み。だが、そのうち翔は光に眼が慣れ気づく。

赤レンガに簡素なベッドに水洗型洋式トイレ。そして鉄格子。

絵に描いて様な牢屋に翔はいた。

「どづいつことだ？」

まだ拭えない疲労と倦怠感そして痛みが彼をベッドの上に横にさせ

た。

そして、さえない脳の思考を巡らせ始める。

昨日、俺は敵に落とされた。

まだその様子が脳裏に焼きついて離れていなかった。

敵機は俺の上にとてつもない速さでループをしてそのまま機銃掃射をした。あれがいわゆる『クルピット』ってやつか……

クルピットとは、スホーイ系統の機体が得意とする空戦起動である。マニョーバ簡単に説明するのならば、高度を変えないで行う宙返り、ループ起動だ。

やり方はまず、水平飛行中に進行方向と高度を変えずに機体姿勢をピッチアップし迎角を90度近くに変え、そのまま水平姿勢に戻る『プガチヨフコブラ』を、水平姿勢に戻さずさらに後ろへと仰け反ると後方に一回転させ水平飛行に戻る。これがクルピットだ。

そして、そのまま翔の後ろは取られ撃墜された。まさに一瞬の出来事だった。

そのまま海に落ちて……で、どうなったんだ？

思考をやめない翔。しかし、一向に思い出せない。

だが、無音の空間にカツコツとブーツの音が響く。

廊下を少女がお盆を持って歩いている。美しいブロンドの髪をもつ

可憐な少女が。

そしてその少女は翔のいる部屋の前に止まり言う。

「お腹すいていませんか？」

訛りの無い綺麗な日本語だった。

「ここは？」

翔は心に浮かんだ疑問をそのまま口にした。

「ソ連の第七人工島です」

その瞬間、翔は自分の状況を理解した。

彼女は敵で、俺は捕虜か

「俺をどうするつもりだ？拷問して殺すのか？」

「いえ、そんなことはしませんから安心してください」

少女は笑顔で答えた。そしてロックを解除し部屋に入った。

「どうだか？クレムリンは人の腸を喰うんだろ？」

翔は毒を吐いてやった。

彼は兵学校でソ連の民は人肉を貪るような連中で、捕まえた兵士は無残に殺す。だからそんな連中を生かすのは世界の為ではないから

殺せ。と教わった。

こいつらを殺すのは害虫駆除と同じことだ。

そういう風に教わった翔。だが彼女は子供をあやすような笑みを浮かべた。

「そんなもの、食べたことはありませんよ。だから、怖がらないでいいですよ。私はただ、あなたと話したいだけですよ」

彼女は翔の最大級の皮肉に最大級の笑顔で答えた。

穏やかな日差しが立ち込める独房の外。要塞とは言えないような穏やかな場所だった。尋問の為に少女に手錠を掛けられ連行されている翔が見たものそれは……

談笑する婦人たちの姿に周りで遊ぶ子供たちと遊ぶ兵士の姿だった。

「彼らは皆、戦争が生んだ難民です」

返ってこない返事。それでも彼女は続ける。

「そして私たちが保護しているんです」

返事も無いのに続ける直向な彼女の蒼い双眸には今の世を嘆く何か
が潜んでいた。

だが彼女はそれでも明るく振舞う。太陽のように。

「そう言えば、自己紹介がまだでしたよね？私は、クララ・アレンスキーです」

覗き込むような彼女の視線。翔はその視線から逃げようとそっぽを向く。向きながら言った。

「俺は、翔。風宮翔」

初めて会話が成立した。彼女は嬉しそうに

「翔ですか？いい名前ですね」

と満面の笑顔を浮かべていった。

十

尋問だった。

翔は終わった尋問に対して思ったことはそれだけだった。

指も残っているし爪もある。そしてあざも無い。

そして聞かれたことは、部隊のこと、生まれのこと、階級のことだけだ。

尋問が終わったらあっさりと部屋へ返され、それっきり。

そして今、彼はやることもなくベッドの上に横になり水銀灯の明かりを見ている。

翔の心の海底から泡のように疑問が浮き上がって来た。

俺の聞いたソ連兵じゃない

彼の聞いたソ連兵は餓民から食物を奪い、犯し、殺す。捕まえた兵士は地獄のような拷問の末に無惨に殺す。

しかし、ここにいる兵士は違う。難民を保護し敵にも好意を持って接す。

「どうなってんだよ？」

ぼそりと呟く。

矛盾だらけだ……本当にあいつ等みんな鬼畜みたいなのか？

そして、彼の胃袋は空腹の音を鳴らす。

「しかも腹減った……」

そんな時、ブーツの音が響く。

「翔。ご飯持ってきましたよ」

お盆を持ったクララだ。そして翔のいる独房に入る。

さっきと同じスープにパン。だが翔は旨そうに見えてしょうがない。

「毒は無いだろっな？」

念を入れて聞いてみた。

「もちろんです。ほら」

クララはパンをちぎり口に入れた。そして翔に差し出す。

「じゃ、いただきます」

翔は凄まじいほどの勢いで食事に食らいつく。

「そんな風に食べたなら喉に……」

案の定詰まった。

翔は必死の形相で旨を叩きパンを胃袋へ叩き込もうとする。数秒、苦しみもだえた翔は苦しみから解放され安堵の表情を浮かべる。そんな彼の姿を見ていたクララはくすくすと笑い声を漏らした。

なにか翔はいわれの無い怒りを覚え

「んだよ？俺をあほでも言いたいのか？」

「いえ……少しおかしくて」

だが逆に笑う彼女の姿を見た翔はなぜかわからないが笑えてきた。

少し間を置いて翔はクララに問うた。

「そついえば、お前日本語上手いけどどこで習ったんだ？」

「私の父が日本人で彼から教わりました。アレンスキーは母の性で、本名は山村クララです」

「そうなのか」

「あと、翔」

「どうした？」

「日本ってどんな場所なんですか？」

突然の問いに翔も驚く。しかし、無理も無いと割り切った。なぜなら資本主義者と社会主義者の間には分厚い『鉄のカーテン』がある。それを超えることは無理なのである。

「わあっ たよ」

「え！いいんですか？」

「ああ」

翔はアリスを自分の傍らに座らせ語り始めた。故郷の桜や友達や家族、小学校、そしてこれまでやった馬鹿ないたずらのことも。

楽しいことはまるで魔法のようだ。時間と嫌な事を忘れさせてくれる。とても敵対者同士に流れていい空気ではない。でも、敵同士であることは変わらない。

「翔、私も行きたいな。日本へ」

クララはぼそりと呟く。

「もし戦争なんか無ければいけるのに。どうして戦争なんて」
彼女はうつむく。その横顔なるのは深い悲しみだけだ。

そして翔の脳裏ではいくつかの答えが浮かび上がる。

新資源

資本主義と社会主義

冷戦

が出た結論は

「知るかよ」

こんな答えしかない。出たところでどうってわけでもない。

「分る訳無いじゃん。俺ら下っ端に」

「だよね」

クララは無理な笑顔を浮かべる。さっき見せた笑顔にくらいれば
一目瞭然だ。

そんな二人の空間に流れる時間を破壊するかのようには振動が部屋に
伝わる。

「どうした!?!」

「わからない。爆発？」

爆発……第七人工島？

翔はひとつ重要なことを思い出した。

この日の日没に攻略作戦が始まることを

MISSION 4 火炎の記憶 前編

5月13日 19時03分

ソ連 第七人工島 独房

耳をつんざくようなサイレンとまばらに鳴る爆発音が基地内に轟く。そして同時にロシア語で何かがアナウンスされている。

翔は思い出した。今日、この瞬間に、この基地に味方が総攻撃をかけてくるということ。

翔は恐怖と訝しさゆえにクララの方に目をやる。

だが、そこにいたクララは彼が今日見た悲しい笑顔や少女らしい笑顔を浮かべた彼女ではない。どこか怖い冷静な表情を浮かべていた。

「翔、ついて来て」

彼女はそう言って翔の手を掴んで歩き出す。翔は散歩に連れられた犬のように彼女について行く。

「どこへ連れてくつもりだよ？クララ？」

「いいから」

階段を下り場所は独房棟内の地下にある武器庫のようだった。数多にある無骨な光を放つ銃器、その光景を見た翔はクララに言う。

「俺に何をさせるつもりだ？俺はソ連のために戦わないぞ」

「違う、あなたの装備品を返すだけ」

そう言っただけ彼女はおもむろに何かを翔に投げ渡した。ホルスターに包まれた一丁のハンドガン、コルトM12だ。

M12は100年前の四五口径のオートマチックピストルのコルトM1911を改修した一品だ。^{カスタム}翔は重い銃を好んでこれを使っている。しかし、人に向けて撃った事などない。

「味方のところに行けばもう大丈夫だから」

そして彼女は去る。その去り際にこういった。

「また逢えたら逢おうね」

その言葉だけを残して走り去る。

翔はその背中を名残惜しげに見とれていた。数十秒の間を空けて翔は

「俺も行かないと」

渡されたM12のスライドを動かして初弾を薬室に入れて翔は駆け出した。味方のいる場所へ。

十

この攻略作戦は一方的だった。

沿岸の兵力を海軍の攻撃機A-13イントルーダー？が一掃してそ

ここに開いた穴に修羅とも評される海兵隊が湧くように上陸する。

そして、防空にあたるスホーイ37やミグ31は最新鋭の制空戦闘機F-28の餌食にされる。

この島に駐留する兵員は偵察の結果判明したのは一個旅団の5000人と航空機は約70機。艦艇は補給艦に巡洋艦合わせて5隻。

対する連合軍は第1海兵師団10000人に航空機、戦闘機50機と攻撃機100機を投入。艦艇は第17艦隊と第7艦隊、計20隻を導入している。

アメリカが得意とする物量作戦だ。

この第7人工島にそれだけの人材を送るのはこの島を尖閣諸島攻略の拠点にするためだ。そして、攻略し終えたら中国に兵を進め、西からの兵と共にモスクワを攻略する。

この攻略作戦はOperation Forever Freedom『永遠の自由作戦』と名が付けている。資本主義と社会主義の長きにわたる対立を終わらせる意味をこめて連合海軍長官、ウィリアム・コーブランドが命名した。

『自由』とは資本主義国家の象徴。対する社会主義国家の象徴は『平等』だ。この戦争はこの二つの思想がぶつかり合っただけ起きた。資本主義と社会主義。国が行っている市場の方針の違いだけで起きたのだ。

簡単に言えば『考えの違い』だ。それだけで多くの人民は死に餓えていく。

翔は囚人棟から出て外を歩き回っていた。だがそこは翔の知っていたあののどかな場所ではなかった。

血と炎、悲鳴がある場所を地獄と呼ぶのならここはまさに地獄だった。

日溜りが溢れていたあの優しかった空間の変わりにあったのはナパーム弾が作り上げた業火。そして爆弾で吹き飛ばされた人体の一部。さっきまで地下にいたから運よく爆撃の第一波はやり過ごせた。

「何だよこれ？」

翔は思わずつぶやいてしまう。だが、翔はこんな光景を見るのは初めてではない。

いやな映像が翔の脳裏で鮮明なビデオのように再生された。

燃え盛る炎。その中でもがき苦しむ人々。そして機銃にやられ見るに耐えない姿に変えられた人々。

そんな思い出ただけで身の毛がよだつ様な映像を脳裏から追い払おうと翔は横に頭を振る。

何も考えるな。味方に合流することだけを考える。

と彼は自分の体に語りかけた。

無心のまま翔は瓦礫とかした市街地を歩いている。難民たちの安住の地でもあつた第7人工島は今は地獄と化している。

翔はもうこんな光景は見たくないと思願していたが皮肉にも運命は彼をまた地獄へ落とす。

息が苦しい。炎に酸素が吸い取られてるせいで呼吸もままならない。灰が酸素を貪欲に貪るがない物は無い、いくら呼吸を行っても息苦しい。

翔は途方に暮れ行く先も分からないままその足を前に進めているときにある光景に出くわした。

彼の後ろで息をしない母親の手を悲痛な表情で握り締める男の子の姿だ。

ロシア語のわからない翔にも何を言っているかは理解できた。きつとこの子は母の名を呼んでいる。

かつて、彼も空襲で母を失った。

血まみれの母の体。その亡骸にすぎり泣きじゃくった自分。

炎の中、感じたあの母の冷たい温度は思い出しただけでもぞつとす。翔の中ではいろいろな感情が渦を巻いていた。母が死んで悲しい。母を奪った敵が憎い。このまま死にたい。でも死が怖かった。

あの時ほど、自分に恐怖した瞬間などない。

そして気づいたら判るはずもない日本語で翔はその子に訴えかけた。

「おい！！死ぬぞ！！離れる！！」

と判るはずもない日本語で翔はその子に訴えかけた。

しかし、無駄だった。

激しい衝撃が地面を震わす。翔の目の前にあった地面はえぐられた。ちよつどあの子がいた場所だった。

跡形もなく消え去った幼子。だがこれも彼にとっては幸せなのかもしれない。この戦乱で親を失った幼児は死が確実に待っている。

翔は走る。頭からあの忌々しい記憶を消し去るために。だが無理だった。母の死を拭えきれない。

「もう・・・嫌・・・だ」

翔は呟く。息がさらに苦しくなる。薄い酸素と胸を締め付けるような悲しみと絶望のせいだ。

もう嫌だ。翔はずっとこれを壊れたスピーカーのように走りながら呟く。

翔は走っているうちに、だだっ広い場所に出た。道路のような場所だった。そしてここが滑走路だと気づくのは彼の横をアフターバーナーの尾を引きながら地を掛ける戦闘機の姿を見てからだ。翔はとりあえずまっすぐ進むことにする。

ここはどこだろう？

そんな事を思いつつ翔はある格納庫を見つける。ここで少し休もう
と思い翔は躊躇も無くそこへ入る。

格納庫はほぼ空っぽだった。だがしかし、一機だけ残っている。

「これは……」

Su47ベルクートが駐機されていた。

昨日俺を撃墜した機体か？

翔はこんな至近距離でこの機体を見たことはない。

静かな空間に駐機されていたベルクートはどこか冷たい空気を放つ
ている。例えるのなら一振りの刀だ。磨かれた刀のような冷たい鋼
の質感。その美しさに翔はしばらく動けないほどに見入ってしまう。
美しい宝石を見つけた少年のような丸い瞳で。

「翔？」

後ろから彼を呼ぶ声がした。知っている声。もう二度と聞けないと
思っていた声。

振り向いた翔の視界にクララがいた。だが、さっきまで着ていた軍
服とは様子が違う。オリーブグリーンのつなぎ状の服に身を包んだ
彼女はヘルメットを抱えていた。

「クララ？クララなのか？」

「そうだよ。でも何で翔がこんなところにいるのか分からないんだけど?」

「お前こそ何でパイロットスーツなんて着てるんだよ?まさか……」

翔はその続きが言えなかった。答えを聞くのが怖かった。だが言うてしまう。

「これのパイロットなのか?」

この状況ではその質問しかできない。この単座のベルクートの前にいるパイロットスーツのクララを見たら誰だってそう思う。

しばらく考える素振りを見せた彼女は重い口を開け言った。

「あなたってここに来る前に撃墜されたよね?」

「そうだけど……」

「そして、この島に流れ着いた。それでね翔、あなたに謝らないといけないことがあるの」

翔の背筋に冷たい何かが走る。

「あなたを落としたあのベルクートのパイロットは私なの」

彼女は頭を下げる。そして一言。

「ごめんなさい」

その言葉を聞いても翔は言葉が出なかった。衝撃的なのか、予想通りなのかよく分からない。でも、いえる事は一つ。彼女はあの時のエースパイロットだった。

「なんで謝る必要があるんだよ?」

「え?」

クララは驚きの言葉を漏らす。

「お前はお前のやるべきことをやった。で、俺はお前に落とされた。それだけじゃないか」

脳内の整理が終わった翔は彼女に言った。

しょうがない。俺はもうその言葉しか出ない。

「クララ、俺はどこへ行けばいい?」

「えと……とりあえずもと来た道を戻れば会えるよ」

「ありがとう」

そう言って翔は彼女に背を向けた。そして歩き出す。

「あと、クララ。もし逢えたら空か平和な場所で逢おうぜ」

背を向けながら手を振る翔の背中に一言。

「翔！！あなたはいいパイロットよ！！また戦えることを楽しみにしてるからね！！」

翔は振り向き言った。

「今度は負けないからな。覚悟しろよ」

パイロットたちには敵味方を超越した物がある。それは、互いの腕を讃え合える伝統だ。新米パイロットは敵のエースを越すことを目標に戦う。それは敵を認めなければできないことだ。そんな、彼らの戦場はこう評されている。

『騎士道の残った最後の戦場』

こうして翔は味方のいる場所へ歩き出す。また、彼女と逢う為に。戦場と呼ばれる空で。

M S S I O N 5 火炎の記憶 後編

同日 午後11時42分

戦火に燃え上がる地上とは裏腹に空は夜の静けさを保っていた。月明かりを冷たく反射して飛翔する銀翼。F-28部隊の第二波であるイーグル小隊、ブリッツ小隊、グレイハウンド小隊、計12機で編成された横一文字編隊は闇に紛れ飛行していた。

『イーグル2敵発見。^{エネミータリホー}数は14。高度3000の距離29です』

リーダー策敵士の矢吹隼人少尉は報告した。

『イーグル1了解。各機A-13編隊の護衛を絶対任務とせよ!!!
いいな!?!』

戦闘前に隊員に発破をかけるような口調で一条明大尉は言った。

「翔大丈夫かな?」

隼人は呟く。そして前方からその問いの答えが返ってきた。

「さあな?でも死んだら死んだらで厄介払いができるもんな」

冗談のつもりでグレッグ・ブラウン少尉は言う。

「そんな事言つなよグレッグ。きっと生きてるって」

隼人は人一倍、人の死を嫌う性格の持ち主だ。さっきのグレッグの

発言も少し癪に障った。

「隼人、会敵予想時間はあとどれくらいだ？」

「あと7分つてとこかな？」

と隼人は、レーダーディスプレイの表示から導き出された距離とこの機の速度を割り出して答えを導き出した。

「敵は絶対にフォックスハウンドやらフランカーとかそんな雑魚ばかりだろうな。今回も撃墜^{スコア}数を稼がせてもらっぜ」

とグレッグは軽口を叩いた。隼人はグレッグに自分なりの見解を述べる。

「敵の戦力を機体のスペックだけで推測するのは良くないと思う」

「何だよ隼人？俺の腕が伴ってないとも言いたいのか？」

「そう言う訳じゃ」

だが、事実といえば事実だ。彼の飛行成績はさほど高くない。グレッグのスコアは1機撃墜。この隊だと最下位である。

熟練のエース、一条大尉に期待の新人フランクと翔たちのせいであまり頭角が見せれない可哀想な奴が彼だったりする。

「まあ、暴れるとするか」

そう言うってグレッグはマスターアームを落とし、AIM-120

アムラームミサイル』を発射準備。

HUD内に浮かび上がるターゲットのシンボル達。その目標たちに矢を放たんとトリガーに指をかけた。

『イーグル1、FOX3（中距離ミサイル発射）FOX3』

と各々中距離ミサイルを発射した。編隊から放たれたミサイルはある種の美しさがあった。それはある昔のアニメを彷彿させるような光景。

遙か彼方の空でぼつぼつと爆発が見える。ミサイルが着弾したらしい。

『敵機の数は……現在9機』

隼人は無線で全編隊に告げる。だが、彼のコックピット内ではロックオンアラートが鳴り響く。どんどんテンポが早くなるアラートと共にグレッグ・ブラウンの心拍のテンポが上がる。

怖い……

『各機散開しろ！！』

だが、グレッグの機体はその場に留まったままだった。

「グレッグ！！何で動かないんだ！？グレッグ！？」

返って来るのは荒い彼の吐息だけ。きつとパニック状態であるに違いない。グレッグはまだ一度もロックオンされたことはない。それ

ほどの場数を踏んできてはいないからだ。

ミサイルに向けて直進する機。動けないパイロット。これの状況で彼に残された道は唯一つ。

『脱出します!!』

そうやって彼は脱出座席のレバーを引いた。分離ボルトが反応してキャノピーを文字通り吹き飛ばす。そして第三工程で、座席のロケット推進剤が点火。隼人の座席を中へ舞わす。一瞬に掛かるおびただしいほどの加速度。だが彼は歯を噛み耐える。そのままパラシュートは開き、自分と座席は分離された。

隼人は空中に浮かぶクラゲのように対空砲火に燃え盛る空を漂うように滑空。

当たらないで

と対空砲の破片が当たらないように神に祈る。どんな演習をしようともこれだけは神頼みだ。砲弾が破裂する度に背筋が凍りつく様な戦慄に襲われる。

地上が徐々に近づいてくる。しかし、隼人はこれで助かったとは思っていない。これから敵地にその足をつけることになるのだから。

ブチ………

高度約5メートルのところだった。この何か紐が切れるような音がしたのは。パラシュートと自分を繋いでいる縄が切れたのだ。

そして、隼人は物理法則のまま落ちる。一瞬のようで長い時間を落

ちる。まるで柵から落ちた玩具の兵隊のように。

声も上げられず地面に叩きつけられた隼人。その瞬間に身の毛がよだつ様な音がする。

「ぐっ」

痛かった。いや、痛みを通り越して熱かった。炎にあぶられた用に激痛が隼人の左足を襲う。それでも隼人は立ちあがろうと痛みと戦った。だが無駄だった。痛い左足が地面についた瞬間に激痛のあまり彼の身はコンクリートの地面に仰向けで倒れこむ。

「こりゃ立てないや」

と不思議と笑みがこぼれる。笑みと共に涙も出た。激痛と虚しさゆえに。

心に巢食う虚しさ。それと対極的な無限の宇宙を映し出す鏡、星空。その瞬く星空を隼人は眺める。

人間はこの星空に憎しみの星を打ち上げたりできる。ミサイルや対空砲火などなど。

「なんて馬鹿なんだろう僕たちって」

こんな美しい星空を己が血で汚すことができる人間の滑稽さ、愚かさ。隼人は少し可笑しく思えてきた。

「大丈夫か？」

声と共に知っている彼の顔を覗き込むように現れた一つの少年の顔。隼人は知っている彼を。そして名を呼ぶ。

「翔？」

「ってお前隼人か！？」

風宮翔だった。自分と同じ部隊で問題児で有名なパイロット。でも、腕は確か。昨日の偵察任務で撃墜され彼の索敵士、宮嶋竜也と共にミッションインアクション MIA 扱いされていたパイロットだ。

「どうした？立てるか？」

翔は自分の右手を差し出す。

「いや……足が折れたっばい。翔は先に行って。あっちに」

彼は翔の背後を指差す。

「拠点がある。僕の事は良い。行ってくれ」

翔はそのまま彼の右手をつかみ上げそのまま肩を組む形をとる。

「何で？僕を担いでいったら敵に見つかっちゃうぞ！？そうなら共倒れだ！！意味ないよ！！」

翔は彼の言葉に耳をやらず独り言のようにつぶやく。

「俺はさっきたくさん人の死を見た。だからもう見たくない。ま

してや、仲間のお前をほっとくなんてさつき死んで行った奴等にとり殺されそうだからな」

翔はそのまま歩き出す。

「さつき死んだ人たちってこの兵士？」

と担がれる隼人は翔に問う。

「いや。民間人。しかも難民だ」

「何で知ってるのそんな事？」

「ちょっと訳あつてな。知っちゃまったんだ」

と悔しそうに俯く。しばらく沈黙が二人の間を包む。そして翔はふつと思いつ出した。彼のことを。

「おい隼人。竜也は見つかったか？」

彼の相棒である竜也のことを隼人に訊いた。

隼人は胸をえぐられるような罪悪感に苛まれる。真実を言うべきか否か。彼の心は迷う。

だが彼は嘘をつくのには純真すぎた。

「まだ見つかってない……」

と隼人は真実を述べた。翔は驚きもしなければおどけもしなかった。

ただありのままにその言葉を受け止めた。

「でも……きつと竜也のことだからひよっこり帰ったりするよ。絶対に！！グレッグも……」

明るく振舞う隼人にも確信はない。ただの気休めにもならない。そんな事は隼人も分かっている。今自分達に出来ることはこの状況を乗り切るといふ事だけ。

「そうだな……絶対にそうだ」

と翔も首肯して足を進める。

「そういえば戦況はどうなってるんだ？」

と歩みを重ねているときに翔は問うた。

「陸上では今島の60パーセントを攻略したとらしいって」

隼人は足の激痛のせいで言った直後苦悶の表情を浮かべる。苦痛に歪む顔を滴る脂汗は隼人の顔つきはもう限界に近そうだった。

「隼人、一回休むか？」

「……いい」

「強がるなよ。あそこの路地裏で一回応急処置するぞ」

そう言って翔は手近にある曲がり角へ足を向ける。たどり着くなり隼人をうつ伏せの状態にそっとさせ彼の尻部にあるサバイバルセツ

トからファーストエイドセットを取り出す。

まず最初に隼人のズボンの袖口から護身用のコンバットナイフで切り込みを入れる。そして患部を探す。

青く変色した部分。ここが骨折した部分だった。翔はエイドセットから添え木と呼ばれる骨がおかしく再生することを防ぐ道具と包帯を取り出す。

そして、左足の関節が動かないように固定。そのまま添え木を患部に押し当て、包帯をぎこちない手つきで巻いていく。

「巻き終わったぞ」

翔は作業を仕上げ終わり一息ついた。

「ありがとう」

隼人は辛そうな笑みを浮かべる。その笑顔には強がりと感謝の色が見える。

「そっぴゃ隼人、サバイバルキットの水飲んで良いか？死にそんなんだよ、喉カラカラで」

「良いよ。だけど僕に分、残してよ」

「サンキュ」

そう言って翔はサバイバルセットに同梱されている飲料水『那須の天然水』に手を伸ばしキャップを開け飲み始める。

一口、もう一口と自然の恵みは彼の喉の乾きを癒す。気づけばもう空っぽだった。

「すまね。全部飲んじゃった」

満ち足りた表情で翔は隼人にボトルを返す。

「もう、残せて言ったじゃないか」

隼人はため息をつく。だがそれはしょうがないと割り切った。

翔はこの燃え盛る戦場を水も飲まずに必死に走り回った結果こうなったのなら飲まれた水も本望である、と。

「翔って本当に訓練生のころから勝手なんだから」

「そうか？」

「忘れたの？あの時に貸した3000円まだ返してくれないじゃないか」

「細かい事にすんな。そんなこと気にしてたら身長伸びないぜ」

と翔は隼人の気にしている事に触れてやった。隼人の163センチの身長は彼の最大のコンプレックスでもある。ちなみに彼は隊で2番目に小さい。(女性隊員込)

「なっ！！それ何！？僕に対する嫌み！？」

「まあな。でも冗談だ」

「笑えないよ。その身長分けてくれるんなら許すけど」

「無理な相談だな」

不思議と二人は声を上げて笑い出してしまった。そこに歩み寄る黒い影の存在を知らずに。

ヒタヒタと歩み寄る黒い殺人の衝動を持った塊。

その殺意を翔は感じ取った。そして振り向く。

そこにいたのは殺意と狂気、カラシニコフ自動小銃を持ったソ連兵だった。

何か訳の解らない言語で嘆く彼のライフルの銃口はしっかりと翔たちを牙を向けている。

そして……

撃ってきた。7・62ミリの暴力の嵐が二人に襲い掛かる。

「隼人！！」

翔は自分たちの目の前にある金属のゴミ箱を遮蔽物にするために隼人と共に飛びのく。翔は自分に驚嘆した。弾丸の着弾より速く自身の力で跳べたのだから。

「翔！！僕が食い止めるから、翔は先に！！」

M4カービンを構える男の姿が路地の向こう側に見える。あの男の屍の向こう、硝煙を吐くライフルの担い手は人を一人殺したとは思えないような冷静な顔をしている。

翔は言葉が出なかった。目の前で人が死んだことに驚いたのではない。彼の放つ冷たい眼光。白人特有の蒼眼、その眼が恐ろしく冷たい。

「お前、どうして撃たなかった？」

突然の問い。言葉に詰まった翔はしばらく固まっていた。

「お……俺はパイロットだ！！ひ……人なんか撃てない！！」

突然予想もしない言葉が口から出た。それが彼の本心だ。

「そうか。それは確かにそうだな」

男は低くうなる獣のような声で翔に言った。

「お前たちパイロットがゲーム感覚で人を殺してる間に俺たちは地獄みたいな空間で人を殺しをしていることを忘れるな。それと、俺について来い。そうすれば空母か基地に帰れる」

そう言つて兵士は隼人に歩み寄り隼人の体を意図も簡単に持ち上げ担ぎ上げた。

「あ、あんた何者だ！！」

と翔は畏怖の念を押し殺して問うた。

「俺か、俺はしがない海兵隊員だ。アレックス・エレット中尉だ」

振り向き言った。その顔に刻まれた幾つもの傷は彼の渡ってきた修羅場の激しさを物語っていた。

翔たちは歩き出す。

それぞれの目的地へ向け。

MISSION 6

2015年 5月14日 午前5時39分

第7人工島 沿岸 ビーチ

ぴたりと銃声が鳴り止み変わりに喚起の音が響く。この攻略作戦が連合軍側の勝利で終わったからだ。

だが、この沿岸部の野戦病院はそんな喜びの世界から程遠かった。

血の臭い。治療中の兵士の苦悶の声……まさに阿鼻叫喚だ。

そんな中、一人の少女が兵士の治療に専念していた。吉田光少尉だ。彼女は沖で待機しているニミッツ級空母J・グラフトンの救急ヘリのクルーで看護師だ。ゆえに彼女は人員不足のためここに一時的に転属という形でこの野戦病院で看護師としてこの任に就いている。

「ぐっ……殺して……くれ……」

光が包帯を替えている兵士の腕は戦場で無くなっていた。そして激痛に耐えれず彼はうわ言の様に呻いていた。

「しっかりして!!あなたが死んだら、残された人がどうなるか考えて!!」

光にはそれしか言えなかった。包帯を巻き終え次の兵士の所へ向かう途中に白衣を着た40代くらいの女性に言われた。

「吉田さん。少し休みなさい。働きすぎよ」

「ですが……」

光は拒む。こんなに苦しんでいる人が居るのに自分はこのうとうと休むことがしたくないからだ。だが女性は言う。

「気にしないで。少し外気に当たったほうが良いわ。これは命令よ」

「はい。そうさせてもらいます」

そう言っただけで彼女は仮設テントを後にした。数時間ぶりに彼女は外気に触れた。

沿岸から見えた水平線は少し色付き日の出を予感させていた。地獄と打って変わってこの場所は美しかった。静かで波の音しかなかった。さっきまでの戦場の音が嘘だったように。

「疲れた……」

彼女はふと言葉を出す。今の光の顔は疲労の色しかなかった。そして手近にあったベンチに彼女は腰をかける。そんな時、不意に声が背後からした。

「すまない。野戦病院はどこにある？」

「はい、あのテント群です。よかったらお連れしましょうか……って……え!?!」

不意に不意を重ねた彼女は驚きの声が隠せなかった。死んだと思った彼が居たからだった。

「翔……生きてたの？」

MIAになっていた風宮翔がひょつこりとしかも海兵隊員と一緒に現れた。しかも、その海兵隊員の肩に何かがぶら下がっていると思つたら、同じくMIAに昨日なっていた矢吹隼人だった。

「どうした？知り合いか？」

とエレットは翔に問う。

「あ、まあ……はい。同じ艦の同僚です」

「そうか……なら話は早い。彼が足を骨折したから、治療を頼みたいのだが」

と肩に乗っている隼人の背中をパンパンと叩いた。それと同時に隼人は『痛いです』などと訴える。

「ですが、ベッドに空きは無いんです。できれば0700に来るへりが来るまで待つてもらえますか？それと、彼の治療なら道具があれば私がしますから」

「そうか。助かる」

エレット中尉は隼人をベンチに下ろした。そして二人の少年兵に向かって言った。

「それじゃ、俺はここで本隊へ戻るからな」

「はい。いろいろとありがとうございました。中尉」

と隼人は椅子に座りながら敬礼。翔もまた敬礼していた。

「ああ」

そう言つて中尉も敬礼をし返して踵を返しその場を去つた。

十

同日 午後1時43分

空母 J・グラフトン 居住区 風宮翔少尉、フランク・ウィルデ
イ少尉の自室

空母内の自室は一部屋二人で管理するのが基本で、上級仕官（佐官クラス）になれば自身の部屋が与えられる。翔は同僚のフランク・ウィルデイ少尉と部屋を共有している。

二段ベッドの上段で翔は浮かない表情で考え事をしていた。無論、竜也のことだった。彼は帰ったときにもまだMIAの状態で足取りもわからない。彼が無事に帰っていることを心待ちしている連中はたくさんいる。彼もそのうちの一人である。

「翔!!」

ボタンと大きな音を立てて金属のドア開く。天然パーマのかかった

栗毛色の髪を生やしたアメリカ系の少年、フランク・ウィルディ少尉が必死の形相で部屋に入ってきた。

「どうしたんだフランク？」

翔はフランクに問うた。荒い呼吸を混ぜながらフランクは翔を急かす。

「事情は後だ！！早く病棟シックベイに来い！！」

急かされるまま翔はベッドを飛び降りた。そしてブーツを半分履きフランクを追う。

シックベイは空母の第2層目にある。この居住区と同じ階層だ。翔は白く長い廊下を走ってシックベイの病室へ向かう。道中で彼は全速力でフランクに走り寄り訊く。

「何が起きたってんだよフランク？」

彼のつむいだ言葉に翔は驚愕した。

「竜也だ！！」

「え？」

そして二人はシックベイに到達した。そこには負傷兵や病人などがある。

「あ、亜衣。竜也は何処だ？」

翔は近くにいるシツクベイ勤務の秋月亜衣に尋ねた。黒く長い髪が魅力的な彼女は軍属で階級はないがここで看護婦として勤務している。

「その……竜也君は……」

彼女は気が弱くいつも声が小さいが今回はさらに常時より小さい。そして彼女はどこか涙ぐんでいた。そして指差した先にはドアがある。そこには『面会謝絶』の看板がノブにかかっていた。

「竜也、やばいのか？」

「……うん」

虫が鳴くような小さな小さな声で亜衣は肯定し、そのまま翔に言った。

「翔君は……入室許可が出てるから入って」

「ああ」

そう言って翔はドアノブに手を伸ばす。ガチャリとドアは音を立て開く。

殺風景な病室にある簡易なベッド。その中に彼、輸血用のチューブが体につながっていた宮島竜也がいた。

「竜也、翔が来たよ」

看病している光が翔の存在に気づき竜也にその旨を告げた。

「しょう

立ち尽くす翔に今にも死にそうな声で竜也は彼の名を呼ぶ。低くかすれた声だが、彼が聞いたかった声だった。

「竜也、お前……」

翔は彼の傍らに歩み寄ってその手を握り占める。その手は冷たく、翔にある『記憶』を連想させる。

母を奪った10年前の空襲のことを。

死に行く母の手は冷たかった。今の竜也のように。

翔の視界は何故か滲んでいた。それが涙ゆえであるのはその場にいる者だったら誰でも解かる。

「何……て顔……してんだよ……未来の大エースさんがよ」

竜也は力ない手で翔の手を握ろうとする。だがもう力など入らずただプルプルと触れえていただけだった。

手が冷たい……母さんと同じだ……

翔は知っていた。人が死ぬときは手が冷たくなるという事を。それは10年前彼の母が身をもって教えてくれたのだから。

するりと竜也の手は翔の手から零れ落ちた。

「竜也？」

ピー

間延びした機械音が室内に響いた。翔とは無縁な心拍計測装置から鳴るピープ音。

心臓の波は静かな海のように平たく、ハートのマークには0という数値が映し出されていた。

これらの事から現れる現状は翔にもわかる。

「宮島竜也少尉。1350にて死亡を確認しました。死因は失血におけるショックだと推測できます」

光は感情のないコンピューターのように光は現状を述べた。

竜也が死んだ。

その事実を受け止めるのに翔は時間がかかった。だが受け止めた瞬間に彼の心の中に大きな津波のような感情が押し寄せた。理性の防波堤をその波を打ち壊し翔は狂ったように竜也の体を揺らし始めた。

「おい、竜也？冗談だろ？なあ？なあ？」

必死に起こそうとする翔だったが光はそんな翔に一喝した。

「やめなさい！！」

「竜也死んだのよ」

光は絞り出すような声で言った。

「は？何言ってるの？何で勝手に死んだことにしんでんだよ？なあ光？」

翔は光に詰め寄った。その翔の表情はまさに狂気を帯びた悲哀だ。

「失血死はどうしようもないのよ……諦めて翔」

「何だよ光！？どうしてだよ！！龍也が死んだってことで良いのかよ！？」

翔は光を揺さぶりながら言った。光は冷静さを欠いて怒りを露にして涙を流しながら翔に言った。

「良い訳無いじゃない！！でもこれが現実なのよ。認めたくないけれど」

悲しい現実、竜也の死を悲しむ二人は泣きながら思った。何ゆえ竜也は死ななければならなかったのか。

MISSION 7 引き金

2015年 6月9日 午後12時24分

空母 J・グラフトン 第184飛行隊待機室

「……以上が新小隊の編成だ」

一条明大尉が告げた。宮島竜也少尉とグレッグ・ブラウン少尉が戦死したことにより、このイーグル小隊に新人2名と戦闘機1機が補充された。イーグル3はフランク・ウィルディ少尉とエドワード・エンフィールド少尉。イーグル4は風宮翔少尉と骨折から復帰した矢吹隼人少尉が新たにペアを組むことになった。そして、イーグル2は新たに入隊したパイロットの和田良亜少尉わたよしあに索敵士まえたるなの前田瑠那少尉だ。

「で、これより新生イーグル小隊は早速だが、哨戒任務が入った。1330にて発進だ。各々支度しろよ」

「はい」

と各自返事をして待機室を後にした。だが翔だけはその場にする事も無くただいるだけだった。

「翔、解散だよ」

そう隼人が肩を叩いても翔は完全に生気を失ったような目をしていった。

「翔!!」

耳元でがなられた翔はびくんと体は反応させた。そして隼人に言う。

「わーっ たよ」

これは彼の口癖だ。だが、今日の彼はどこか力が無い。いや、竜也が死んでからいつも、この調子だ。翔は重い腰を上げ待機室を後にした。そんな翔を隼人はそこはかとなく心配そうな目をやる。

「隼人」

一条隊長が隼人を呼び止めた。

「何です隊長？」

隼人は彼の方へ向きかえった。

「翔のことなんだが……あいつ、今日が初飛行なんだよなお前とは？」

「ええ。それが？」

「いや、少しな。翔はああでも立ち直るのに少し時間がかかるタイプのパイロットだ。もしもの事……具体的に言うとパニックしたら、脱出しる」

刹那、隼人の脳裏に彼の元相棒の最期がよぎる。彼の元相棒もパニック状態になって操縦不能になってそのまま死んだ。だが、隼人は頭を振って脳内をリセットする。

「大丈夫です隊長。翔は強い奴ですから何とかしてくれます。それに、今配備されたF - 28Dには補助操縦桿が後部座席にありますし」

「そうか、翔を頼んだ」

「はい。お気遣い感謝します」

そう言って隼人は待機室を駆け足で去った。

「だと、良いんだけどな」

隊長は意味深げな言葉を残し彼もロッカー室へと向かう。

十

同日 午後1時12分

世界で一番危険な飛行甲板は今日もいたって正常。いつものように騒がしい。翔は騒音も感じずに自分のF - 28Dワイバーンの216号機が駐機されている場所へ向かう。機のある場所に着いた翔は気だるそうにステップを登り身をコックピットの中へ押し込める。

F - 28DのコックピットはB型に比べると明らかにシンプルに電子機器がまとまっていた。タッチスクリーン式のディスプレイにエンジンを点火するための数少ないボタン。そして、操縦桿にスロットル。

第5世代以前の戦闘機は目を回すような数のボタンがコックピット内に押し込まれていたが、この第6世代のF-28は違う。少年兵でも扱えるように操作のボタンの類は激減されていた。それが可能にさせたのは高性能なコンピュータのおかげだ。姿勢制御、燃料の配分、火器管制などをコンピュータがしてくれる。だからパイロットは自分の操縦に専念できる。

そして格闘戦ドッグファイトの能力も跳ね上がった。それは推力変更ノズルベクターの導入が大きな理由だ。このノズルはエンジンの噴射口を上下違う方向に動かすことに姿勢制御を行うことができる。さらには急激な空戦機動を行うこともできる。

翔はこの気体が来る事を心待ちにしていたがその熱ももう冷めた。竜也が死んだからだ。

「翔!! お尻のノズル動かして!!」

整備士の弥生那瑚准尉の音がヘルメットの中にあるスピーカーを揺さぶった。言われるがままに翔は足元にある垂直尾翼ラダーペダル兼ノズル操作ペダルを踏んだり手前に引いたりした。それと連動して後方のノズルは上下に動く。

足で前に押せばノズルは下を向き、引けば上を向く。そしてペダルを真下に踏めばヨーイング、いわゆる二次元的な左右の旋回ができるようになってる。

「うん。完璧だね。そのスムーズな動きがたまらないわあ……ローレンス!!」

機体が変わっても相変わらずの那瑚だ。しかし、翔は無反応だ。

「ま、無事を祈るよ」

後方のノズルを点検し終えた那瑚は前に出て来て、第一エンジンの点火サインである人差し指を上げた。

翔は慣れた手つきで右エンジンの点火ボタンをつける。そして第二エンジンの点火サイン。翔はそれと同時にエンジンに火を灯した。エンジンの回転数が同調したときを見計らい翔は酸素マスクを口に近づけ那瑚に命令を出した。

「チヨークを外せ」

チヨークとは機体が動かないようにギア、いわゆるタイヤに付ける木製の止め具で、ドラストツパーのような形をしている。

「了解」

那瑚の声は真面目その物だった。そして、艦上作業員レインボーチームがチヨークを外す。そして足かせを外されたF - 28は誘導員の指示に従い右舷、第二カタパルトへと誘導された。

黄色いウエアを着たカタパルトオフィサー達がギアとカタパルトの連結作業を始めた。ガチャンと音を立て連結は完了。

そして、カタパルトオフィサーがエンジン全開のサインを出す。翔はスロットルを前に押しエンジン出力を上げた。エンジンは回転数と咆哮の甲高さを急激に上げ、戦馬のように胴震いした。その咆哮は翔に『早く飛ばせ、早く飛ばしてくれと』訴えるばかりに甲高さを増す。

だが、機とは反対に翔には戦意なんて無い。

ついにノズルはアフターバーナーの火を燃やし、エンジンの出力は臨界点までに高まり、翔はカタパルトオフィサーに敬礼。

次の瞬間、彼の機体はカタパルトの蒸気の尾を巻き蒼穹へと舞い上がった。

十

『イーグル3より各機へ、敵影らしきものを捕らえた。これよりIFFを使用します』

そう隼人が宣言すると敵味方判別装置を使用した。待つこと数十秒結果が出た。隼人の座席にあるレーダーディスプレイに表示されている編隊の表示が黄色から赤に変わった。これは、敵勢反応を示す。味方は緑で不明機は黄色、敵機は赤である。

『エネミータリホー敵機発見。高度4000。距離85で3機です』

隼人がそう告げるとイーグル1、一条隊長は指令を出す。

『よし、AMRRARM（中距離ミサイル）で攻撃を仕掛けるぞ！！
良いな』

『2了解』

『3了解』

イーグル4、すなわち風宮翔からの返事がない。

『4、復唱は？』

『……4了解』

翔はそう言うと安全装置マスターアームを解除。操縦桿にある武装変更ボタンを中距離ミサイルを選択した。

216号機のHUDに三つのシンボルが浮かび上がった。AIM・120に内蔵してあるレーダーが目標を補足した。

『イーグル1、FOX3』

『イーグル2、FOX3』

『イーグル3、FOX3』

『4、FOX3』

ミサイルの一斉発射。四基のミサイルは目標へと大気を切り裂きながら突き進む。

レーダー上でミサイルが目標へ飛翔する映像を隼人は見守るが、1機にミサイルは当たる。多分、ウランク機が射たミサイルであろう。

『ブレイクナウ
各機散会、各自攻撃せよ』

間合いも縮まり、隊長の指令と共にイーグル小隊の機は散会、目標へと飛びつく。イーグル4を除く全機が。

空中戦はすぐに終わった。数で勝るイーグル小隊の勝利で。

結局翔は何もできずに終わった。

ただの短距離ミサイルの一発も機銃も撃たずに。

「翔、どうしたんだろう?」

帰路の編隊の中にある一機のF-28のコックピットの中でフランクは後部座席に座るエドに問う。

「さあな。でも俺の推測だが、竜也のことだろう」

「わかってるさ。でもよ、あそこまで腑抜けになるか?」

「なるさ。お前、もし俺だけが死んでお前だけ生き残ったらどう思う?」

「そらぁお前」

「な?分かるだろう?」

「そうか」とフランクは一言残して、青い高みを眺める。

その瞬間、獲物を狙う隼のごとくこの編隊に急降下して来た。そして、最終到達点は左翼にいる翔だった。

『翔!!!上から敵機だ!!!』

フランクは精一杯の声を張り上げ翔に警告する。だがその時にはもう遅く敵は機銃を放っていた。

だが、潜在能力とは恐ろしい。翔の機体は左にその翼を翻しその弾筋を優雅に回避した。

そして、そのまま空中戦が始まる。さっきの戦闘で闘う事の出来なかった翔を誰かが許さんといわんばかりに。

迫り来る敵。和解も望めない状況。これを解決できる方法は『戦う』しかない。

翔の心の奥にある闘争本能が再び火を点す。理性という名のリミッターを解除して敵を殺そうとする。

「許さない」

そう殺意のこもった言葉を残し翔は左右に鋭角的な旋回による回避機動イクを行った。敵も、抜かまいと翔の行った角度より鋭く旋回。それを繰り返えず、このイタチごっこを人はシザースと呼ぶ。いかに相手より急角度な旋回を出来るかがこの戦いの勝利を左右する。

そんな時に、コクピット内にパイロット達が聞きたくない音が響く。ミサイルロックされた。滝のような汗がヘルメット下で滲み出す。蒸し暑さとかではない。脂汗だ。それも恐怖による。無意識下で翔はロックオンアラートの音が怖くなっている。

「り……龍也……」

この音を聞きたびに竜也を思い出す。自分のミスで死んだ龍也を。

「翔！！あれをやってやれ！！」

彼の脳内に声が響く。誰の声かは分からないが。

翔は無意識に両足のペダルを前に踏みそのまま機体の機首を垂直ま
でに持っていく。

機体は空中で止まる。

いや、後ろへと下がっていく。

失速を利用した荒業、ソ連機の十八番であるプガチョフコブラであ
る。

ものも見事に敵機は翔を追い抜く。

翔は操縦桿にある武装変更ボタンでミサイルを機銃に変えてガンサ
イトに敵機を入れる。そしてスホーイは絶好の位置に来た。翔はト
リガーに指を掛ける。が発射しない。

「は？ぶっ放せねえぞ」

翔は更に力を掛ける。

「機体に異常は無いよ」

インターコムごしから聞こえた隼人の声を疑い更に力加える。また
発射されない。翔は操縦桿を見た。彼は更に驚く。

「指が動かない!？」

翔は指を見る。そこで分かったのは震えている事だった。

ちくしょう!!動け!!指!!

翔は指に力を掛ける。すると指は動いた。だが翔は撃たなかった。何かが翔の行動を止めている。それは多分良心か何かだ。翔の鼓動は早くなり脂汗がしたたる。

そう翔の良心は彼の体に訴えかけてくる。あのときの光景で。

ソ連領で見た地獄。敵も味方も同じ人間であるということを見に染みさせた第7人工島。

「わあああああああああつあああああつあああああ
あ」

理性と体が引き離れた瞬間だった。翔は心の奥底にあった「殺人」に対する抵抗を相手を殺さなければならぬと言つ脅迫にも似た義務感でその引き金を引いた。

大きな空で起きた小さな爆発。

それは翔に教えた。人殺しの何たるかを。

少年の嘆きにも似た悲痛な叫びは無限の空には響かず。狭いコックピットのだけで響いただけだった。自分の矮小さを教えるかのように。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5181j/>

少年と空 - EAGLE KNIGHT -

2011年10月12日08時00分発行